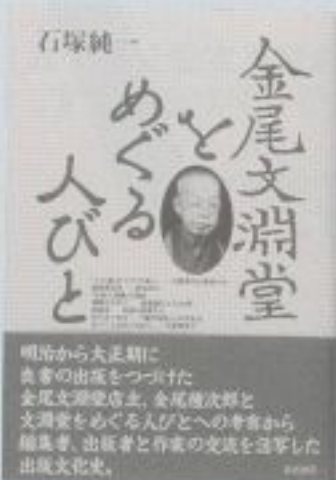


## 金尾文淵堂をめぐる人びと



石塚純一著  
新宿書房 2005.2

金尾文淵堂(かなおぶんえんどう)といわれても誰も知らないでしょう。日本近代詩の出発点に立つ薄田泣菫(すすきだきゅうきん)や『みだれ髪』の歌人と謝野晶子らの本を次々と出版し、明治のベストセラー『不如帰(ほととぎす)』の作者徳富蘆花(とくとみろか)と親しく交流した出版社金尾文淵堂は、主人の金尾種次郎が1947年に亡くなるとすっかり忘れ去られたからです。残されたのは木版画がたくさん入ったきれいな古本だけです。本は完成すると筆者のもですが、一冊の本の背後には必ず一人の出版者がいます。

本書では、著者を訪ねて語り合い、内容にふさわしい美しい本に仕上げるために画家や写真家や印刷会社の間を奔走する一人の出版者の失われた足跡を調べ、近代の文学や学問の基になった本がどのように編集されてきたかに迫ります。編集の仕事の原点を探り、出版各社がそれぞれ築き上げた書物群にはどんな意味があるのかを考えました。もちろんインターネット時代に突入し、変貌する現代の読書環境を意識しながら書きました。(文化学部 教授)

## 戦後化学肥料産業の展開と日本農業



網島不二雄著  
農山漁村文化協会 2004.12

日本の化学肥料は、技術、品質ともに世界最高の水準にある。一粒の肥料から少しずつ成分が溶け出し、180日間にわたって作物に必要な養分を供給するという優れものもある。しかし、これほどの高い技術、品質水準があるからといって、日本の化学肥料産業が世界を席捲するかというと、そうはならない。何故だろうか。これほどの高品質の肥料は日本以外にはほとんど需要がないからである。では、これからどうすればよいのか。その前に何故こうなってしまったのか。こういったことを考えるために本書に取り組んだ。

何故こうなったかという点に関しては、戦後からの

化学工業、化学肥料産業のデータを詳細に提示して、(1)化学肥料産業が戦後日本化学工業の先導的役割を担っていた、(2)高い技術をもちながらも、国際的視野、戦略の決定的不足、(3)国内農業への安易な対応といった点を明らかにした。また、これからの発展方策に関しては、市場規模は小さいものの、日本のローソク産業の近年の健闘ぶり等神事、仏事から、癒し、イベント等へのライフサイエンスとしての進出に学ぶべきことを強調した。見かけに以上にしっかりとした味を提供できると少しばかり自負している本である。

(経済学部 教授)

## 宣長と『三大考』—近世日本の神話的世界像



金沢英之著  
笠間書院 2005.3

本居宣長の名は江戸期最大の国学者として有名だが、その主著『古事記伝』を読み通したという人を見つけるのは難しい。それもそのはず、史上初の『古事記』全巻注釈として書かれた同著は、筑摩書房版の全集本で四巻にわたる、いまなお『古事記』注釈書としてこれを超える規模のものはないほどの大著だからだ。

ところがこの『古事記伝』をコツコツひもといてみると、それが現代の感覚でいう「注釈」とは異質なある意志につらめられていることに気づきはじめる。それがいったい何なのか知りたいところだが、すぐに答えを出すには『古事記伝』はなかなか手強い相手だ。

さいわいここに、宣長の弟子、服部中庸が著した『三大考』という書物がある。『三大考』は『古事記伝』の説にもとづき、この世界の成り立ち、今にいたるありさまを、『古事記』の神話から読み出して、十枚の図として示したものだ。宣長はこの書を絶賛し、『古事記伝』の附巻として刊行した。そこから見えてくるのは、『古事記伝』を著した宣長の意図が、自分たちの生きる近世の現実を説明し根拠づける神話を、注釈というとなみをつうじて構築しようとするところにあったということだ。それをあらわに教えてくれるのが、この『三大考』という書物なのである。(文化学部 助教授)